

## 変化への対応

関口はつ江

世界が大きく動きつつある現在、我が国の保育界も転換へ向かって動き出した。幼稚園では新教育要領に基づく保育が始まり、保育所保育指針も三月には新案が提出された。今、保育にかかわっている者が、この時にどのように行動するか、その責任は重いと云えよう。

海外でも様々な動きがみられる。筆者は少し前にイギリスの Department of Education and Science とフランス北部にある教員養成校を訪れる機会を得た。イギリスでは昨年九月に五歳児以上に対するナショナルカリキュラムを作成し、教育内容を十項目（言語、算数、科学、美術、体育など）定めたこと、また親にもできるだけ保育の場に参加してもら

うようにしていることなど、フランスでは一九九〇年より子ども学習評価を従来の一か年毎から三年の幅（二〜四歳、五〜七歳、八〜十歳）に変え、発達の個人差を配慮しようとしていること、一九九二年からは就学前、初等の教員と、中等、高等の教員養成を同じ制度で行い、幼児教育にも高度な知識や技術が必要となることへの対処をしていることなど、国情に合わせてはいるが、背後には幼小の関連を強め、教育内容の一層の充実をはかることへの意欲が伺えた。

そこで、我が国の変革の行方が気になるところである。今回の幼稚園教育要領の改訂に対して、「現場は結局は変わらないのではないか」とのささやき

が聞かれる。それは何故であろうか。

行きすぎた幼児教育の是正をはかり、幼児期に幼児らしい体験を十分にさせることが強調されているが、これは識者の認識ではあるが、幼児に直接かわっている親や教師自身がどれ程そう感じているのか、との素朴な疑問がある。幼児に必要なものが何か、の共通認識が欠如し、「建前と本音」論で逃げているのが現状のように思われる。

幼児教育のみならず、「教育」の目的及び方法に対する考え方が揺れ動き、子どもの実態に対応しきれていない現在、せめて保育にたずさわる者は、しっかりと「何が大切なのか」を知っていなければならない。

保育の内容や方法を変えるのは「幼児本来のもの」「変わらざるもの」を守り育てるためのものであり、本来目ざすもの、育てるべきものが変わるわけではなからう。「幼児らしさを発揮させるため

に」「幼児らしからぬ」と見られて来た活動が展開することもあり得よう。これからは見える部分と見えない部分の在り様の関連についての把握が特に必要になるう。

自然的にも社会的にも急速に変わりつつある環境のもとで、その行動や感覚が変化して来ている幼児に応ずるためには、保育（保育者のかかわり、保育の素材など）が変わらなければならない。こちらが変わらなければ、幼児は更に変わらざるを得ないことへの自覚が求められる。保育者は対象の変化への鋭敏な感覚と変わらないもの（教育の原点、その目的）への確固たる信頼の感覚を、バランスよくもち合わせると共に、皮相的な変化への対応は新たな固定化を生むことに注意して、慎重なそして確実な保育の転換にむけて歩を進めたいものと考ええる。

（郡山女子大学短期大学部）